

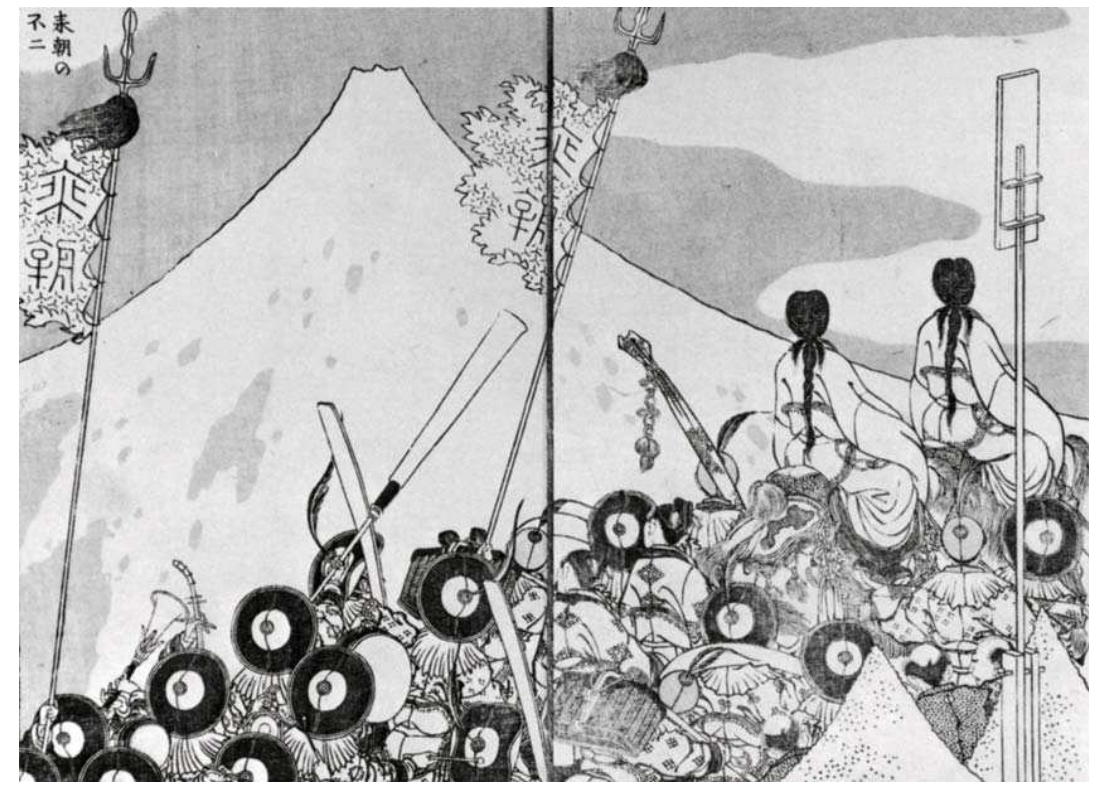


富士山と 静岡の人々

比較文化学者
金 両基氏



経歴
1933年、東京生まれ。早稲田大学卒業。韓米の大学教授を経て、静岡県立大学・常葉大学教授。著書に『キムチとお新香〜日韓比較文化考』『能面のような日本人』『物語韓国史』ほか。
1987年から静岡で朝鮮通信使行列の再現を推進している。韓国文化勲章、文化庁芸術祭最優秀賞など受賞。



葛飾北斎「来朝の不二」。『富嶽百景』天保4年(1834)発刊より。朝鮮通信使が最後に江戸を訪れたのは明暦元年(1764)で、北斎が4歳の時。実際に行列を見たか不明だが、富士山を左に見ながら江戸へむかう通信使行列を描いている。本来「清道」であるはずの旗の文字を「来朝」に変え、喇叭や太鼓などをもった楽隊を描いている。

朝鮮通信使が見た富士山

駿府の徳川家康に国書を伝えるために

1607年、第1回目の朝鮮通信使は朝鮮王朝の国王から託された書契(国書)の返書を、徳川家康に伝達するために派遣された使節団である。浜松に着いた一行は駿府にいる家康に王からの書契(国書)を伝えるのが自分たちの使命であることを家康の使者に繰り返し返す。この国書は国交回復の命を受けた対馬藩主宋義智の苦心の改竄であり、朝鮮王朝ではそれをうすうす感じているが、將軍に国書の返書を伝えたのである。そこから往時の政がうかがえる。

「一行が大井川を渡った頃、家康から元豊を通じて『すでに位を譲ったので国書を受け取ることはできないが、使臣一行は江

戸に直行し新関白(二代將軍秀忠)に国書を伝え、その帰路駿府でお会いしましょう」という旨の伝言が届いた。道中の接待は、きわめて真心が込められていた」と副使慶七松が記した『海槎録』(使行録)にある。

同年閏4月17日駿府を過ぎるころ、宋義智らが駿府城に立ち寄り家康に使節団一行の報告をする時、家康は「使臣一行が駿府を通り過ぎるとき、側女たちといっしょに楼上の上から見物して大変喜んで」と清見寺に泊まった二行に伝えている(使行録に記された月日はすべて陰暦)。

富士川から見た富士山を詳細に描写

清見寺から海の景観を楽しんだ様子を「海辺の山麓にある清見寺の海辺に二里ほど



金有声「山水花鳥図押絵貼屏風」(清見寺所蔵、写真提供:静岡県歴史文化情報センター)。左から「洛山寺図」「梅鳥図」「花鳥図」「金剛山図」。明暦元年(1764)に江戸へむかう朝鮮通信使が清見寺に宿泊したとき、関根主忍住職は、前回の通信使から「清見寺は朝鮮国洛山寺を彷彿させる」と聞いていたため、三使(正使、副使、従事使)に「洛山寺の真景を絵師に描かせ、帰路に絵を贈りたい」と願い、画員の金有声が描いたこれらの水墨画を入手。「金剛山図」は、富士山と対比する形で、朝鮮国一の名山である金剛山を紹介するために描いたものと推定され、多数の尖峰を連ね、主な峰の呼称を書き入れている。池大雅は、金有声を訪ね「富士山を描くには、どんな技法を用いたらよいか」と問うている。

の松林があり、その中に神社があり仙境のようであった」と三保松原について記しており、一行は江戸からの帰路、家康の遣わした豪華船で、その海上から富士山を眺望している。江戸に向かう18日、藤川(富士川のこと)に至り、富士山との最初の出会いが『慶七松海槎録』にみえる。

藤川(富士川)の船橋を渡る。川の北に富士山が見え、富士山はこの国で最高峰と言われ、頂上はあたたかみ(米などを蒸すための鉢形の土器)を伏せたようであった。山の中腹から上の方には真冬のように雪が広く積もり、その眺めは銀山玉峰が空中に高く聳えているようであった。日本人たちはこの雪は7月15日頃には半分ほどに薄くなり、9月になるとまた積もると言った。金が溶けるほどの酷暑の日でも、その辺りは寒く、人々は近づかない。山の頂上はなだらかで周辺が一里ほどもあり、その真ん中に大きな池があり、その深さは計り知れない。山の高さと周辺は40里ほどもあり、山麓の周辺には駿河・信濃・甲斐・上野・伊豆などの地域が山を囲むようにある。峰にも溪谷にも草木はなく、角のない一塊の大きな石のようである。藤川の水はこの山から湧き出て、凍った雪が溶けて流れるので、流水は冷たく、川を渡る

人はその寒冷に耐えられぬといった。

清水湾に船を浮かべて使節団をもてなす

使節団は帰路も清見寺に泊まった。そのとき家康は、駿州から清水湾へ豪華な船を5艘遣わし、往路清見寺の境内から眺めた仙境の位置、清水湾内の船上から富士山の景観を楽しませる。その一艘は「家康が乗る船で金銀を鑲めた」豪華船であったという。わたしは三保松原から眺望する富士山の景観を韓国でも喧伝しているが、その景観が富士山世界遺産登録にふくまれた。そこに松原があり、社のある景勝地であること、家康は知っていたのである。

江戸時代、釜山で結団式を済ませた朝鮮通信使は、対馬・壱岐・瀬戸内海・大坂湾を経て淀川から東海道を通って江戸で10回、將軍と国書を交わし、そのうち2回は日光東照宮まで行った。その経路には通信使の文化遺産があり、両国の市民の間でそれらや帰路などを世界遺産に登録しようという動きが広がっている。両国政府が支援すれば可能性はある。一回目の使節団は国交回復を発信した家康に静岡で歓待され、両国は江戸時代、平和外交が続いた。

それは世界に誇れる平和外交の証であり、静岡は、その中心地でもある。